

## 熱河省赤峰附近並に哈爾賓郊外より發見せる 舊石器時代人類遺品

工學博士 德 永 重 康

余は滿蒙調査研究團員の一人として昭和八年六月より十月迄、滿蒙の地質古生物を調査した。其内去る六月には余と直良信夫氏とにて、哈爾賓郊外の地を半ヶ月餘發掘を行ひ、十月には清水三郎氏及び松澤勳氏が、赤峰東北三〇〇籽の朝陽溝を調査した。歸京後採集品を精査した處、計らずも夥しき獸骨化石と混じて、幾多の人類加工品を發見した。今其略報を述べる。

### 一 哈爾賓郊外何家溝

同地は吉林省顧鄉屯中の一部落で、溫泉河と稱する低濕地である。此川側に深さ三米、二米平方程の試鑿坑を六〇許り掘つて、地質調査と共に古生物の所在を試験した。最初の内は失敗に歸したが、第五〇號坑を掘る時より有望なる化石層に打ち當てた。此邊の地質を述べると、大抵一〇乃至四〇耗厚さの表土(現世層)の下に、直ちに含化石層が水平に横つて居る。此も二層に分れ、上層は淡水産貝類化石に少しく陸産貝類化石を交へた鼠色の微砂質粘土よりなり、其厚さ約一米前後である。其下に存する下層は、極めて僅少の淡水貝類化石を混ゆる細粒砂層であつて、厚さ一米又は少し厚い。獸類化石は以上兩層中何れにも産出する。余等は此下層より更らに下部一米以上も掘進したが、整合的に同質の粘土と粗粒砂のみであつて、決して地質學上のより古い時代の成生物が直ぐ下には横はつて居らぬことを知つた。上下の含化石層が後述する通り最新世のものである以上、此下に横はる地層も同時期のものである。但し此下の地層中からは古生物の遺物は發掘し得られなかつた。

余等の發掘地一帯には、上部の地層が河流に由て削剝されて、現世の河成層が堆積して居る。然し哈爾賓一帯の高臺地には、前述含化石層の直上に、約三米以上の黃土狀粘土層が水平に横はつて居る。此黃土狀粘土層の外に、純粹の黃土(Loess)が發達し居るや否やは未だ精査を施して居らない。

余等は含化石層中より數百點、驚異的多數の哺乳類化石を發掘した。内には完全に上下顎齒具備せる犀の頭骨や、兩角共保存された

「バイソン」、二米に近い「マンモス」の牙、象、犀、水牛、馬、鹿、牛、鼠類等の完全なる臼齒、其他角、肢骨、脊椎骨等を合すると、其數擧げて數々可からざる程である。目下種類研究中であるが假りに左の四八種を擧げて置く。

*Canis lupus* L., *C. sp. a.*, *C. sp. b.*, *C. sp. c.*, *Hyæna ulina* Matsumoto, *Felis sp.*, ? *Pseudocionurus sp.*, ? *Tamias sp.*, *Arvicola sp.*, *Microtus sp. a.*, *M. sp. b.*, *Siphonurus sp. a.*, *S. sp. b.*, *Ochotonoides cf. complicidens* Boule et Teilhard, *Moschus sp.*, *Capreolus manchuricus* Neck, *C. sp.*, *Rusa sp.*, *Pseudaxis graggi* Zdansky, *Cervus (Euryceros) cf. pachystylus* Youngs, *Cervus elaphus* L., *Cervus xanthopygus* A. M. Edwards, *Megaceros sp.*, *Cervus (Sika) nippon manchuricus* Swinhoe, *Palaeostragus sp.*, ? *Gazella przewalskyi* Buchner, *G. sp.*, *Sus cf. lydeckeri* Zdansky, *Sus sp.*, *Rhinoceros tichorhinus* Cuv., *R. cf. sinensis* Wwen, *R. sp.*, *Bubalus sp.*, *Bo primigenius* Boj, *Bison prisicus*, *B. exiguus* Matsumoto, *Equus hemionus* Pallas, *E. sp.*, *Elephas primigenius* Blum.

此等化石を整理中に余等が發見したのは、此等化石と明らかに共生して人工を以て敲き壞された四肢骨が、夥しく存在したことである。肢骨は或る一定の長さに揃へて折壞され、一端に關節面が保存され、内には縦に二分されて居るものもある。此狀態は天然の力に由て打ち割られた者でないことが、實物を見れば判明する。

猶人間が骨に加工して或る目的に供した骨器が多數發見されたが、形狀の鑿狀をなすもの三個、銛狀が三個、楔狀が一個、皿狀が一個、槍身狀（第二圖版第一圖・第二圖・第三圖・實物の二分一大）、肉切庖丁狀（以上の名稱は用途を示すにあらず形の形容詞なり）等多數であつた。又「メガセロス」の角、「セルプス」の角、「ガツエラ」の角に加工した角器三個も出た。殊に面白いのは骨面に或る彫刻を残したもの三個を得た。刻畫は不幸磨滅して明瞭でないが第一圖（實物大）のは稍や或る形を想像せしめる。

以上の通り明らかに人工を加へた骨片は夥しく發見したが、石器は僅かに五品を得た。其内皮剝（日本の先史考古學者に依て呼ばれた）の形に似て居るもの二個を得た。此もの、工作は粗末であるが、表面には一線の稜を有し、裏面は平たく、切斷面は扁平な類三角形をなし、質は玄武岩である。第二圖に示したものの（實物大）は下邊縁に明らかな小さい剝取りが加へられてある。他の三個は多少細長い形をして内一個は淡灰色を呈した「チャート」、二個は灰色の石英質石片である。三個共前品同様表面に縦走する一稜線があり、裏面は平たく、横斷面は低い類三角形を呈する。發見の石器は以上のみで其數甚だ少ない。其理由としては現今は廣漠たる平地で、少なくとも六〇料離れて漸く古期岩石よりなる山嶽に出會するが、最新世の古へも亦平地續きであつたらうと想像される。



然る時は此邊一體沼澤地か河流に沿へる處であつて、近くに石材を得る方法が極めて困難であつた爲めであらう。

以上略説した通り、古代人が哈爾濱附近で「マンモス」犀其他の獸類と共に居住したことは明らかである。猶(一)余等の調査した含化石層及び下層共、近代人の手に由り發掘又は攪亂された形跡は微塵だも認められず、全く天然の儘であること、(二)骨の加工具合と共存の状態にて知る通り、古代人が其生存前に居つた獸骨を集めて加工したものでないことは、特記して置く次第である。

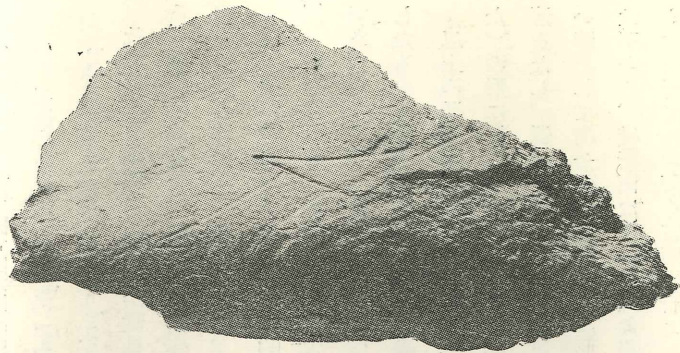
當時の古代人の生存時代に就ては前記四八種の哺乳類化石中判明せる種類を検して、概括的に中部最新世の上部、換言すれば舊石器時代中の *Monsterial* と思考して居る。

## 二 赤峰附近朝陽溝

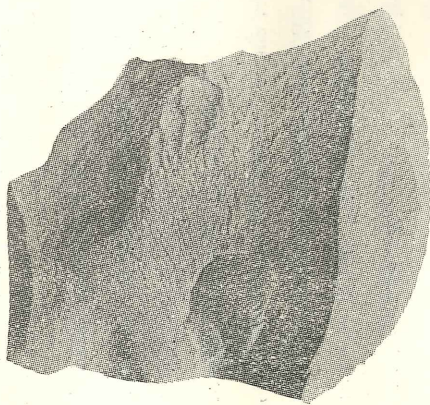
清水三郎氏、松澤勳氏は滿蒙調査研究團員として、昭和八年十月赤峰の東北三〇料朝陽溝の古生物調査に赴いた。同所附近一帯は黄土 (*Loess*) の臺地であり、其の河が深く割り河流は著しく蛇行して居る。

黄土の厚さは二〇米に及び、上下通じて略同一の物質よりなり、黄土特有の柱狀節理が上下に發達して居る。

成因は水成であると云ふ證據を得られない爲め、風成の原生層と見做して置く。此黄土の内に散點して獸骨化石が埋まり(第三圖中立てる人の頭の右上に白く見ゆるは獸骨化石)、殊に下部層即ち黄土沈積最初の時期に近き堆積層中に多くの化石が存在した。化石中鑑定し得らるゝものは犀 (*Rhinoceros tichorhinus* Cuv 第五圖、實物大) の上顎左第一臼齒と、



第一圖



第二圖



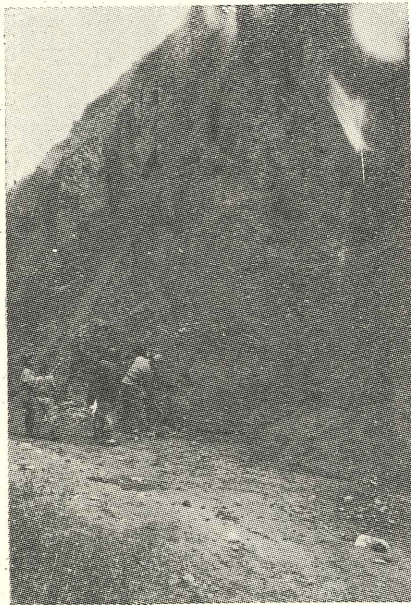


第三圖 朝陽溝化石產地遠望

*Bubalus* の角と「マンモス」の脊椎骨である。骨に附着した土を洗滌精査した結果、哈爾賓同様の骨器數個を發見した。其内二個は第二圖版第四圖・第五圖(實物の三分二大)に示す通り、哈爾賓産にて槍身狀骨器と稱したと同様の形をなして居る(圖は兩地方のものと比較の爲め示す)。又一個は稍や扁平なる骨の表面に、不規則であるが稍平行した幾多の粗い凹みと、全く不規則な細線が多く入り亂れて疵付けられてある。此凹線の出來方には余は左の考へを抱いて居る。(一)此模様は骨が元來持つ凹みや刻線ではないことは、他の骨を比較して見れば直ちに判明する。(二)此凹線が人工に由らずして天然力にて出來たとするには、少なくとも此骨が他より移動され、何か強き力を加へられたと想像せねばなるまい。然し此邊一帶に風成の黄土を覆はれて水平移動を考ふることは出來ない。(三)*Rodentia* 又は他の獸類が肉を喰ふか、己れの齒を磨くかの際印した齒型とは、形式を異にして居る。(四)之と殆んど同形式の骨片が哈爾賓の人工骨器中に混じて多く發見され(第二圖版第六圖・第七圖は此比較の爲め

に示す)、此にて彼我同一状態と見做して差支へあるまい。

以上の事實に由り朝陽溝にも假令標本は少なくとも、古代人遺物の残り居ることを首肯せしむる。其時代は哈爾賓に多數存在する *Riss-noeeros tichorhinus* Cuv. が此地にも發見したことより同一時期と見る方が今の場合穩當であらう。又一方には朝陽溝では此厚其他の化石の時代は、黄土の堆積中でも古い時分に屬するらしい。若し朝陽溝の黄土が明らかに *Primary loess* である證據を有し、Barbour 氏の云ふ通

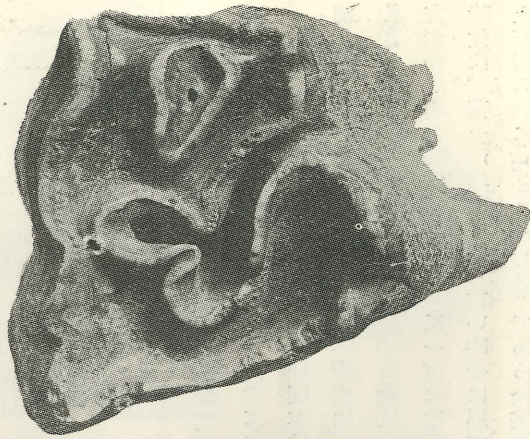


第四圖 朝陽溝化石採集光景  
(崖は總て黄土よりなる)

り黄土の堆積の初めを Middle Pleistocene (Anderson 氏は張家口附近の黄土中より同様 *R. tichorhinus* を得たと報じて居る) とすることが眞實ならば、此點から云つても朝陽溝の古代人時代を中部最新世と推定し得らるゝであらう。

要するに所載二ヶ處の發掘品の調査は黄土堆積時期の觀念其他地質學上の事實を一層明らかにすることも出來、古生物の智識を進め、東亞古代人の進化程度を論ずることに役立つものと信ずる次第である。

終りに臨んで此調査に關し直接間接援助を給はつた陸軍當局・子爵土岐章氏・坪上貞二氏・江戸千太郎氏・宗像金吾氏・牟田哲二氏・島村孝三郎氏に深く感謝の意を表する。



第五圖

## 口繪第二圖版説明

第一圖・第二圖・第三圖・哈爾賓附近產槍身狀骨器 (實物の二分一大)

第四圖・第五圖・赤峰附近產槍身狀骨器 (實物の三分二大)

第六圖 赤峰附近產骨化石の表面に疵付けられたる模様 (實物の二分一大)

第七圖 哈爾賓附近產骨化石 (實物三分一大)